

「スラヴ主義から汎スラヴ主義への展開」再考

大矢 温

はじめに

かつて別稿で「クリミア戦争後に農奴制改革を含む一連の改革が進む中で、従来もっぱら国内問題に注目していたスラヴ派は、国外のスラヴ系諸民族に目を向けるようになる」とし、「こうしたスラヴ派の思潮は、70年代の後半には国民的な汎スラヴ主義の奔流へと展開する」と指摘した¹。議論をより精緻なものにするため、「スラヴ主義から汎スラヴ主義への展開」について再考してみたい。

本論においては、古典的スラヴ派の時代が終了した後に、多様な要素を包含していた「スラヴ主義」の中から、ほかならぬ汎スラヴ主義がスラヴ主義の後継者として展開した過程を分析する。

I 「古典的スラヴ派」

まず「スラヴ派」と「スラヴ主義」の関係について確認することから再考作業を始めたい。1830年代の後半にモスクワのサロンにおいて、ドイツ・ローマン主義やヨーロッパのナショナリズムの影響を受けてロシア、およびロシア民族の特殊性をもとに議論を展開するグループが発生した²。このグループの思想を特徴づけたのが、1838年から39年にかけての冬に展開したA. C. ホミャコフとИ. В. キレーエフスキーとの論戦だったといわれる³。この論戦において

¹ 大矢温「クリミア戦争直後のイヴァン・アクサーコフ：スラヴ主義から汎スラヴ主義への展開」、札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』第69号、2008年、177頁。

² コシエリョーフは1835年から36年にかけての冬の話として、「週3回」エラーギン家、スヴェルペーエフ家、そしてコシエリョーフ家で「最も活発な議論」が行われ、「ここでは、生まれつつあったロシア的傾向と当時支配的であった西欧主義との間の戦いの第一歩が姿を現した」と回想している。そこにはキレーエフスキー兄弟、エラーギン夫妻、ホミャコフ一家、スヴェルペーエフ一家、そしてシェヴィリョーフやパゴーゼンがいた。ただし、「ロシア的傾向」を示したのはホミャコフ一人だった。Кошелев А. И. Записки / Сост. Цимбаева Н. И. МГУ. 1991. С. 77-78.

³ Цимбаев Н. И. Славянофильство, 2-е издание. М., 2013. С. 76.

ホミャコフは、論文「古きものと新しきもの」で己の「ロシア的傾向」を定式化したのだった。ここでホミャコフは「ほかの世界とは違うルーシの地」の2つの原理として人民と権力の一体性、および正教会の純粋性を挙げたのだった⁴。非征服王朝としての権力、およびカトリックに対する批判という点にホミャコフはロシアの特殊性を見、己の「ロシア的傾向」の根拠としたのだった。これはП. Я. チャダーエフが「哲学書簡」で提起した問題に対する直接的な回答であったし、またこれは啓蒙主義と西欧の歴史に人類普遍の法則性を見る西欧派グループとの論戦における理論的基礎となった。

それから2年余りののち、1841年の夏に流刑先のノヴゴロドから一時的にモスクワに戻ったА. И. ゲルツェンが目にしたのは、А. С. ホミャコフ、イヴァンおよびピョートル・キレーエフスキー兄弟、К. С. アクサーコフらが西欧派と論戦を展開しているさまであった⁵。ゲルツェンは言及していないが、Д. А. ヴァルナーエフを加えておおよそ1843-44年ごろまでにモスクワのサロンにおける論争を通して「スラヴ派」というグループが形成され⁶、その後、И. С. アクサーコフ、А. И. コンシェリョーフ、Ю. Ф. サマーリン、そしてВ. А. チェルカッスキーらがこのグループに合流した⁷。いわゆる「古典的スラヴ派」の形成である⁸。

ただし、グループ形成以前にもドイツ・ローマン主義やナショナリズムの影響を受けて、ロシア民族の特殊性の問題に取り組んでいた者もいた。たとえば1828年にイギリス・ローマン主義詩人のバイロンの詩の翻訳を出版したピョー

⁴ Хомяков А. С. О старом и новом // Полное собрание сочинений. М., 1900. Т. 3. С. 11.

⁵ アレクサンドル・ゲルツェン著、金子幸彦、長縄光男訳『過去と思索 2』、筑摩書房、1999年、51-78頁。

⁶ 形成された時期を特定することはできない。「我々のサークル」に参加していたコンシェリョーフもサークルが「その誕生の年をおおよそですら特定することはできないくらい知らないうちに形成された」と回想している。Кошелев. С. 86.

⁷ Цимбаев. С. 113-114. 古典的スラヴ派の出版活動については、大矢温「古典的スラヴ派の言論活動」、札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』、2014年、第80号参照。

⁸ グループではなく、理論面からスラヴ主義の問題にアプローチした清水氏は「古典的スラヴ主義」の代表者としてホミャコフと И. キレーエフスキー（以上「第一世代」）、およびК. アクサーコフとサマーリン（「第二世代」）を挙げている。清水昭雄「古典的スラヴ主義とは何か」、『ロシア思想史研究』、2007年、第4号、70-71頁。

トル・キレーエフスキーは、同年にギリシャ人による民族独立運動に端を発した露土戦争が勃発すると⁹、バイロンに倣って戦争に参加しようとする。ローマン主義とナショナリズムは若いピョートルを強く突き動かしたのであった。ただしこの願望は母 A. П. エラーギナの強い反対にあって果たせず、失意の彼は兄イヴァンとともにドイツ・ローマン主義の薫り高いミュンヘンに留学することで妥協せざるをえなかった¹⁰。1830 年にミュンヘンに到着したピョートルは、ミュンヘン大学で歴史学者で社会評論家のヨハン・ウィルヘルム・ジンケイゼン、シェリング学派の自然哲学者ローレンツ・オーケン、そしてシェリング自身の講義を聴講することができたのみならず¹¹、当時ミュンヘンで勤務していた Ф. И. チュッチェフの助力によって実際にシェリングその人と面談することもできた¹²。帰国後もロシア民族の特殊性を研究するために、民謡や民話を収集するのだが、この時点で彼は「スラヴ主義者」とは呼ばれていない。

M. П. パゴーゼンもまた、早い時期からドイツ・ローマン主義とナショナリズムの影響下でロシア民族の問題に歴史学の分野からアプローチしていた。モスクワ大学在学中にライチのサークルのメンバーであった彼は、ライチの縁で外務院（後の外務省）古文書課の若者を中心とした「愛智会」にも出入りし、そこでシェリングをはじめとするドイツ・ローマン主義哲学を研究した。1824 年にマギストル論文「ルーシの起源について」を提出し、1835 年にモスクワ大学教授に就任すると彼はヨーロッパへと旅立つ。ベルリン大学で K. リッテル

⁹ トルコ帝国からのギリシャ人独立に際してロシア外務省内ではネッセリローデの正統主義を転換して民族的要素を外交政策に取り入れるよう Ф. И. チュッチェフが主張した。大矢温「Ф. И. チュッチェフとギリシア独立問題」、中央大学法学会『法学新報』、2006 年 3 月、第 112 巻 7/8 号参照。

¹⁰ キレーエフスキー兄弟の母親の A. П. エラーギナはチュッチェフの父を通してチュッチェフ一家と「親しい知り合い」だった。Письмо А. П. Елагинной к В. А. Жуковскому от 5 июня 1829 // Литературное наследство. М., 1968. Т. 79. С. 25.

¹¹ Письмо П. В. Киреевского И. В. Киреевскому от 9 ноября 1829 // Там же. Т. 97. Кн. 2. С. 185.

¹² すでにシェリングの知己を得ていたチュッチェフが面会のおぜん立てをしたものと思われる。Письмо П. В. Киреевского И. В. Киреевскому от 7 октября 1829 // Московский вестник. 1830. Ч. 1. № 1. С. 115. Цит. По. Летописи жизни и творчества Ф. И. Тютчева. Кн. 1. С. 90.

の歴史地理学や L. ランケの歴史学などの講義を聴講した後、プラハでチェコ人の民族運動家の V. ハンカや P. J. シャファリクと語り合う機会を得¹³、深い感動を受けたといわれる。モスクワへの帰途、当時オーストリア領であったリヴォフでピョートル・キレーエフスキーらとともに古代ルーシの資料調査を行っている。この時点でパゴーデンが国外のルーシ人、およびスラヴ民族の問題に関心を持っていたことは疑いないが¹⁴、それが故にこの時点の彼が「スラヴ主義者」と見做されることはなかった。

のちのスラヴ派のグループと問題を共有していても「スラヴ派」あるいは「スラヴ主義者」とは見做されないのである。このことは、「スラヴ派」というのが主に 40 年代のモスクワのサロンにおけるグループを示す概念であって、「スラヴ主義」という理念によって結集した人々を指す概念ではない、ということを示している。たとえば「マルクス主義者」といえばマルクスの教説を信奉する人を指す概念であって、その人の時代や場所を問わないのとは違う。ロシアの「スラヴ主義者」の場合、「スラヴ派」¹⁵というのは「スラヴ主義」という理論の下に結集した人々ではなく、逆に、「スラヴ派」と呼ばれる人々の最大公約数的な見解が「スラヴ主義」なのである¹⁶。この多様性が「スラヴ主義」の特質である。他方、民族的特殊性を議論の基礎に据えながらも、「スラヴ派」と呼ばれるグループに属して活動しない限り「スラヴ派」とは見做されなかった点も指摘しておく必要がある。たとえばチュッチェフが「スラヴ派」と呼ばれないのもこの理由である。

¹³ Барсуков Н. Жизнь и труды М. П. Погодина. С-Пб., 1891. Т. 4. С. 312-313.

¹⁴ パゴーデンとルシン人については、大矢温「ロシア汎スラヴ主義とルシン人の民族性を巡る問題」、札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』、2015 年、第 83 号参照。

¹⁵ ロシア語ではどちらも *славянофил*。概念的に区別はない。ここではある理論の下に結集した人々を「～主義者」、グループのメンバーを指す概念として「～派」と区別する。

¹⁶ この間の事情については大矢温「古典的スラヴ派の言論活動」、同上、2014 年、第 80 号、41-44 頁参照。

II 「古典的スラヴ派」のメンバー

すでに述べたように、「スラヴ派」とは 1830 年代末にホミャコフの周辺に集まった人々からなるグループである。この点を確認したうえで、次にどのような人々がこのスラヴ派のグループに集まってきたのか確認しておこう。「地主貴族」という以外にも、このグループのメンバーが地縁、血縁、大学の学縁など、重層のかつ濃密な人間関係によって結びついていることがわかると思う。

まずはスラヴ派の中心人物と目されるホミャコフ。後に「ソボルノスチ」の理論を定式化するなど、主に宗教面からロシア民族の特殊性にアプローチしたが、大学はモスクワ大学物理数学科に入学し、1822 年に卒業している。在学中の 21 年にギリシャ人の反トルコ蜂起が起きると義勇軍として参戦。卒業後はペテルブルクの騎馬隊、28 年に露土戦争が勃発するとベラルーシ騎兵隊に入隊、戦闘にも参加して負傷し、血気盛んな一面を見せる。詩人としても知られるが、その一方で 1825 年に画家を志してパリに出かけて油絵にも熱中している。ホミャコフ一家はトゥーラ、リャザン、スモレンスキー県に所領を持っていたが、冬の間はモスクワでエラーギナ、スヴェルベエフ、そしてコシェリョフのサロンに出入りして主に西欧派との論戦に花を咲かせていた。その当時の住所は、1844 年に結婚して現在の新アルバート通り付近にあったサバーチャ小広場に引っ越すまではクズネツキー・モストとペトロフカの交差点 Петровка д. 6/3 にホミャコフ家の持家があったので、そこに住んでいたものと思われる¹⁷。

次にサークル内で当初ホミャコフの「極度に教会的なところ」、「ヨーロッパ文明を十分評価していない」ところを批判してサークル内の「西欧主義者」と目された¹⁸イヴァン・キレーエフスキー。ホミャコフより 2 歳年下 1806 生まれ。さらに 2 歳年下に弟のピョートルがいる。兄弟の母親は「クラスヌイ・ヴォロータの共和国」と呼ばれた文学サロンの主催者として有名な A. П. エラ

¹⁷ Чудов А. В. Сост. Улицы Москвы. М., 2011. С. 147.

¹⁸ Кошелев. С. 88-89.

ーギナ¹⁹。詩人の B. A. ジュコーフスキーとは親戚関係にある。イヴァンは幼年時代にはコシェリョーフと「同じ通りに」住み、同じ家庭教師から J. ロックをはじめとする合理主義の教育を受けた²⁰。1823 年に外務院古文書課に就職すると、「古文書館の若者」の一人としてコシェリョーフとともに「愛智会」に参加し、シェリング哲学を研究した。愛智会にはイヴァンやコシェリョーフのほか、П. Д. チェルカッスキーそしてパゴーゼンらがいた²¹。1830 年に弟のピョートルとともに外遊。ベルリンでヘーゲル、ミュンヘンでシェリングの講座を聴講している。帰国後の 32 年に雑誌『ヨーロッパ人』を発刊するが、彼の論文「19 世紀」が原因で即座に発行禁止になってしまったため、出版者・編集者としての道が閉ざされてしまい、40 年代は大学の哲学教授の職を求めて研究を続けていた。

少し遅れてコンスタンチン・アクサーコフとサマーリンがホミャコフの「生徒」²²になった。特にコンスタンチンは「スラヴの傾向」に熱中し、「道行く人々が彼をペルシア人と思ったほど」民族的な服装をして、論争に於いてもスラヴ派の中心人物と目されるようになった²³。コンスタンチンは 1817 年の生まれなので、ホミャコフやキレーエフスキー兄弟より一回り若い。サマーリンは 1819 年生まれなので、さらに 2 歳若い。古典派スラヴ派の中での世代ギャップがここにあると考えてもいいだろう²⁴。コンスタンチンもまた、モスクワ大学在学中にヘーゲル哲学に熱中している。彼は 1832 年に 15 歳でモスクワ大学文学科に入学すると、バリンスキーらとともにスタンケーヴィッチのサークルに参加し、ヘーゲル哲学に熱中したのだった。卒業後も哲学研究をつづけ、1835 年にカンデダート論文、46 年にはマギストル論文を書き上げている。37 年に

¹⁹ 現在もエラーギナ邸はモスクワの地下鉄 Красные ворота 駅近くの хоромный тупик д. 4 に現存している。

²⁰ Кошелев. С. 47.

²¹ Цимбаев. С. 82.

²² Кошелев. С. 89.

²³ ゲルツェン、過去と思索 2、47 頁。

²⁴ 古典的スラヴ派の第一世代にローマン主義の影響とそれによる宗教への関心が顕著であるのに対して、ヘーゲル哲学の洗礼を受けた第二世代は現実への志向が強い、との指摘もある。清水昭雄『『古典的スラヴ主義』とは…』、71 頁参照。

スタンケーヴィッチが外国に去り、彼のサークルが解体すると、おそらく哲学的な興味からであろう、サロンの討論に参加し、そこでスラヴ派と交流するようになる。

サマーリンもまた、若い世代のスラヴ派であり、スタンケーヴィッチのサークルからスラヴ派のグループに移ってきた点でもコンスタンチンと一致する。もともとペテルブルク生まれではあったが、1826年、7歳の時に家族とともにモスクワの「トヴェリスコエと新聞横丁の角」²⁵に移住してきた。当時のモスクワ大学のすぐ裏手にあたる。彼もまた、他の古典的スラヴ派のメンバーと同様に、「モスクワっ子」とみなすことができよう。1835年に15歳でモスクワ大学哲学部の歴史-文学科に入学しているので、学歴の面でも他のメンバーと共通する。在学中のサマーリンはスタンケーヴィッチ・サークルでヘーゲル哲学に熱中した。他方、大学で彼にロシア史を教授したのはパゴーゼンだった。サマーリンがモスクワ大学を卒業してマギストルとして研究者の道を歩み始めた1839年は、ホミャコフによってスラヴ主義の基礎が築かれたとされる時期に符合する。やがてホミャコフの影響で正教に興味を持った彼は、ヘーゲル哲学によってロシア正教を説明しようとした。サマーリンが学位論文を提出するのが44年のことなので²⁶、大学のサークルやサロンでの論争は彼のアカデミックな関心と深く結びついていたはずだ。

古い世代のスラヴ派の一人コシェリョーフは、すでに述べたようにイヴァン・キレーエフスキーとは同い年、しかも「同じ通りの」住人で、彼とは幼年時代から密接な交流を続けていた。唯一、モスクワ大学で彼と机を並べることはなかったが、卒業後、外務院古文書課、および愛智会では再びキレーエフスキーと合流した。1823年当時、愛智会の主催者で詩人として知られるB. Ф. Одоевскийはカメルゲルスキー横丁の現在のモスクワ芸術座のあるあたりに住んでいて、そこが愛智会の集会場になっていた。モスクワ大学とは目と鼻

²⁵ Нольде Б. Юрий Самарин и его время. М., 2003. С. 13.

²⁶ Самарин Ю. Ф. Стефан Яворский и Феофан Прокопович, как богословы // Сочинение Ю. Ф. Самарина. М., 1880. Т. 5. С. 11-164.

の先である。新聞横丁のサマーリン家やクズネツキー・モストのホミャコフ家の持家も至近距離にある。ホミャコフとの縁については、外務院の転勤でペテルブルクにいた1827年に病床のД. В. ヴェネヴィチノフの看病を通して「それまで知り合い」程度だったホミャコフと親密になったという²⁷。当時ペテルブルクにはモスクワからヴェネヴィチノフ、オドエフスキー、チトフらが外務院の転勤で赴任しており、モスクワという地縁が両者を結び付けた可能性もある。

初期のスラヴ派グループの活動にとっては、親密な人間関係が重要な意味を持っていたのである。このことは、西欧派のメンバーとの関係でもいえる。後にゲルツェンが「異なる方向を見てはいたが、鼓動する心臓は一つであった」²⁸と回想しているように、西欧派のメンバーも、スラヴ派のメンバーも、等しくニコライ一世の抑圧的社会からの出口を求めるモスクワの知識人だったのだ。ところが、論争が深化するにしたがって、西欧派とスラヴ派の隔たりが拡大する。

それを象徴する事件が1844年4月にモスクワ大学で催された西欧派のグラノフスキーによる公開講義のあとで起こった。すでに対立が深刻化していた西欧派とスラヴ派の和解を願って、アクサーコフ兄弟の父親、セルゲイ・アクサーコフ邸で公開講座の祝賀会をゲルツェンとサマーリン²⁹、そしてセルゲイ・アクサーコフが企画したのだ³⁰。ただし、和睦は成功しなかった。少し後にゲルツェンは、両者を「分かち、越えることのできない恐るべき枯谷」が残った、と日記に記している³¹。共通の問題意識と友好的な雰囲気で開催していたサークルやサロンにおける論争の歴史に一つの区切りがついたのだった。

²⁷ Кошелев, С. 57.

²⁸ ゲルツェン、過去と思索 2、72 頁。

²⁹ ゲルツェンはサマーリンをスラヴ派の中で「もっとも全人類の見解に近い」人物とみなしていた。Герцен. Дневник от 17 мая 1844 // А. И. Герцен собрание сочинений. М., 1954. Т. 2. С. 354.

³⁰ Комментария // Там же. С. 476.

³¹ Герцен. Дневник от 4 июня 1844 // Там же. С. 356.

III 論争の拡大

グラノフスキーの公開講義は、また一面で、従来狭いサークル内で展開されていた論争を公開の場で展開するようになった、という点でも画期であった。サークルやサロンの論争は、その舞台を公開の場に移して展開されるようになったのだ。西欧派が『祖国雑記』誌上で自説を展開していたのに対し、当初、自分たちの出版物を持っていなかったスラヴ派のグループも、1846年と1847年の2度にわたって『モスクワ文集』を出版することに成功し、そこで自説を発表したのだった。

『モスクワ文集』創刊号は1846年にアクサーコフ家と親しかったB. A. パノフを編集者として出版された。ここにはイヴァン・アクサーコフの詩、A. H. ポポフの芸術論、C. M. ソロヴィヨフの古代ルーシに関する論文、コンスタンチン・アクサーコフの正書法に関する論文、あるいはホミャコフの「外国人についてのロシア人の意見」といった手紙形式の記事など、従来からのスラヴ派的な論調を引き継ぐ記事のほか、Я. А. リノフスキーという人物が「英国における穀物法の完全廃止について」という論文を寄せている。ここで彼は、「自由貿易」という「フランス革命の結果にも匹敵する重大な大変革」が「陰謀も民衆争乱もなく、一滴の地も流されずに」行われた意義を説き、自由貿易を擁護している点が目を引く³²。

翌1847年に発行された『モスクワ文集』の第2号には、イヴァン・アクサーコフやB. A. ジュコーフスキーの詩のほか、ポポフの歴史論、そして芸術における民族性についてのホミャコフの議論など、従来からのスラヴ派の論調を引き継ぐ記事のほか、ベルグが収集した民謡、あるいはチェコからのパゴーデンの手紙など、民俗学的、汎スラヴ主義的な記事が加わった。他方、これと並行して、パゴーデンの『モスクワ人』にもスラヴ派は寄稿している。たとえばサマーリンはここに「現代人の意見について」を発表し、K. Д. カヴェーリンの説く個人の原理にロシア民族の共同体の原理を、国家に対しては「ゼムリヤ

³² Линовский Я. А. Об окончательном отменении хлебных законов в Англии // Московский сборник. М., 1846. С. 493.

一」の原理を対置している³³。

ところがこの『モスクワ文集』、48 年号は発行されなかった。ヨーロッパの革命運動の影響でロシア国内の思想弾圧が強化されたこと、それとの関係でイヴァン・アクサーコフの私的な手紙が「リベラルのだ」とされて彼が逮捕されたこと³⁴、サマーリンが発表した『リガからの手紙』が問題となり彼が逮捕されたこと、などが原因と考えられる。サマーリンはこの『手紙』の中で沿バルト県のドイツ人地主とロシア人農民の問題を「オストゼイ問題」として提起したのだった³⁵。

イヴァン・アクサーコフを編集者に据えてコシェリョーフが『モスクワ文集』を復刊したのは 1851 年のことだった。復刊された『モスクワ文集』には、アクサーコフ兄弟、キレーエフスキー兄弟、ホミャコフ、コシェリョーフといった古典的スラヴ派のメンバーが寄稿している。西欧とロシアの両文明を対比したキレーエフスキーによる哲学論文「ヨーロッパの啓蒙とそのロシアの啓蒙に対する関係」のほか、古代ロシア民族の習慣について分析したコンスタンチン・アクサーコフの歴史研究、ロシア民謡を収集したピョートル・キレーエフスキーの民俗学、選民思想を謳ったホミャコフの詩、といった従来からのスラヴ派の議論に加えて、コシェリョーフが 1851 年ロンドン万博の見聞記を寄稿している。西欧社会の効率性、および万博の会場となったクリスタル・パレスやそこに展示された農業機械などの近代技術を礼賛するコシェリョーフの記事は、抽象的で古色蒼然とした印象を受ける従来のスラヴ派の議論の中にあ

³³ *Самарин. О мнениях современника* // Сочинения Ю. Ф. Самарина. М., 1877. Т. 3. サマーリンとカヴェーリンの論争については、勝田吉太郎『近代ロシア政治思想』、創文社、昭和 36 年、83-93 頁参照。

³⁴ См. Приложение к Петербургским письмам (Вопросы, предложенные Ивану Сергеевичу Аксакову III-м Отделением) // Иван Сергеевич Аксаков в его письмах. Т. 2. Ч. 1. М., 1888. С. 147-163.

³⁵ 「オストゼイ問題」については下記を参照。山本健三「広域共生をめざす政治的ナショナリズム」、科研費報告論集『競争的国際関係を与件とした広域共生の政治思想に関する研究』（研究代表大矢温）、2014 年札幌。Он ОЯ «Остозейский вопрос» в творчестве Ф. И. Тютчева // Н. Г. Чернышевский. Статьи, исследования, и материалы, Саратов, вып. 18, 2012.

っては異色の存在のように見えるが、これも「国家の作為と地方の自然的発展」という視点でとらえれば従来のスラヴ派の議論の射程内の議論である³⁶。

さて、再刊された『モスクワ文集』年4回発行の予定だったが、結局復刊第1号を出版しただけで廃刊となってしまった。発禁処分の原因は、キレーエフスキーの論文だといわれている³⁷。以後、キレーエフスキーに続いて古典的スラヴ派のメンバーが次々と事実上の執筆禁止処分に処せられたこともあり³⁸、ニコライ治世末期のこの時期、古典的スラヴ派は沈黙を強いられることとなった。

抑圧的な出版状況の中ではあったが、この時期までに、「官許国民性とは違うロシアの民族性」、「ロシアと西欧の対比」、「西欧の合理主義や個人主義に対するロシアの正教的土壌の優位」、「全一性（ソボルノスチ）」、「普遍性と民族性」、あるいは「国家とゼムリャー」、「モスクワとペテルブルク」、ピョートル大帝の評価、といった従来からの論点に加え、自由貿易論、帝国内の民族問題、汎スラヴ主義、そして近代技術論と多面的な論点がスラヴ派の思潮に合流したのであった。また、論文として公表できなかった草稿ではあるが、コンスタンチン・アクサーコフがこの時期、「ロシア民族の非国家性」、「国家とゼムリャー」の問題を提起していたことも指摘しておく必要がある³⁹。「スラヴ派グループの思想」、つまり「スラヴ主義」とは、このような多様な思想の複合体なのである。

³⁶ この点については大矢温「А. И. Косиери́й и近代技術」、『競争的国際関係を…』、参照。

³⁷ «Киреевский, Иван Васильевич». СИЭ. М., 1965. Т. 7. С. 278.

³⁸ См. Пирожкова Т. Ф. А. И. Кошелев – «главный распорядитель» журнала «Русская беседа» // «Русская беседа»: история славянофильского журнала / Под ред. Егорова Б. Ф. и др. С-Пб., 2011. С. 12.

³⁹ Аксаков К. С. Об основных началах русской истории // Полное собрание сочинений Константина Сергеевича Аксакова. М., 1861. Т. 1.

IV 「古典的スラヴ派」を巡る諸条件の変化

新帝アレクサンドル二世の即位とクリミア戦争の終戦は、抑圧的なニコライ体制からの転換という意味でロシア社会に画期をなした。農奴制改革をはじめとする大規模な改革が焦眉の問題として提起された。対外的には、敗戦によって地に墜ちたロシアの国際的なprestigeをいかに復興するか、という問題があった。検閲が緩和されたこともあり、この時期、これらの問題を巡ってロシアの言論界は大いに活気づいた。スラヴ派もその例外ではなかった。

1856年に雑誌『ロシアの談話』の発行が許可されると、スラヴ派はこの雑誌を拠点として西欧派の出版物と目されたチェルヌシシェフスキー編集の『現代人』、カトコフの『ロシア通報』に対して論陣を張ったのだった。まずは人類の普遍性と民族性の問題、ロシアの民族性、その特徴としての正教信仰、非国家性、共同体、といった従来からの論点を巡って論戦が展開した。

『ロシアの談話』創刊号の「学問」欄に掲載されたサマーリンの「学問における民族性について一言」は、学問芸術を「全人類的なもの」とする『モスクワ通報』に反論したものだった⁴⁰。同じく創刊号に掲載されたコンスタンチン・アクサーコフの「ロシア的見解について」もまた、ロシア民族の特殊性を強調するものだった⁴¹。コンスタンチンはまた、「ロシア民族の非国家性」、「ゼムリヤーと権力」に関しても、C. ソロヴィヨフの『ロシア史』に関する書評において、西欧派に対して一連の批判を展開している⁴²。国家権力についてはチェルカッスキーが『ロシアの談話』の第2号でモンタランベールとトクヴィルに対する書評を通して中央権力と地方自治の問題を提起している⁴³。

⁴⁰ Самарин. Два слова о народности в науке // Русская беседа. М., 1856. Кн. 1. Науки. С. 35.

⁴¹ Аксаков К. С. О русском воззрении // Там же. С. 84-86; Он же. Еще несколько слов о русском воззрении // Там же. Кн. 2. С. 139-147.

⁴² Он же. История России с древних времен // Там же. Кн. 4. Критика. С. 1-53; Он же. История России с древнейших времен // Там же. 1858. Кн. 2. Критика. С. 1-33. Конスタンチンは新帝アレクサンドル二世に宛てた手紙においてもロシア民族の非国家性を主張している。Он же. Записка о внутреннем состоянии России // Быть России в благоденствии и славе. М., 2002. С. 376-397.

⁴³ Черкасский В. А. О сочинениях Монталамбера и Токвиля // Там же. 1857. Кн. 2. Критика. С. 23-88. 論争については竹中浩「ロシア自由主義とトクヴィル」、岩波書店『思想』、

また特に農奴制改革を目前としていたこの時期、共同体の問題に関する議論は、抽象的、学問的問題の領域にとどまらず、現実的、実務的な色彩を帯びていた。『ロシアの談話』創刊号に掲載された И. Д. ベリャーエフの論文は、同年の『ロシア通報』第3号、第4号に発表された Б. Н. チチューリンの論文「ロシアにおける農村共同体の歴史的発展概観」を批判したものだった⁴⁴。チチューリンのマギストル論文「17世紀ロシアにおける地方制度」に対しては、モスクワ大学法学部教授の Н. И. クリョーロフが長文の批判を寄稿した⁴⁵。

来るべき農奴解放に対する関心が高まる中で、すでに1847年に「強制より自発」を著して農奴の労働に対する自由労働の利点を説き⁴⁶、さらに解放に当たっては土地付き解放を主張していたコシユリョーフは、「義務労働から雇用労働への転換、および共同体的土地所有についての雑誌論文について」を発表し、自らの実務的経験に基づいて共同体を擁護し、農民の土地付きの解放を訴えた⁴⁷。

とはいえ、この時点で古典派スラヴ派のグループは2人のメンバーを失っている。1857年にキレーエフスキー兄弟が相次いで病死したのだった。古典的スラヴ派のグループはその論陣において哲学と民俗学の分野における貴重な論客を失ったのだった。

さて、ロシアの民族性についての従来からの論点に農奴解放に関わる議論が加わったことによって議論の幅が広がるとともに、西欧派との間の論争が一層

1985年7月号、参照。

⁴⁴ Беляев И. Д. Обзор исторического развития сельской общины в России // Там же. 1856. Кн. 1. Критика. С. 1-69. 農村共同体の起源に関するソロヴィヨフとベリャーエフとの論争については、杉浦秀一『ロシア自由主義の政治思想』、未来社、1999年、101-116頁参照。

⁴⁵ Крылов Н. И. Критические замечания, высказанные профессором Крыловым на публичном диспуте в Московском университете 21 дек. 1856 г. на сочинение г. Чичерина: Областные учреждения России в XVII веке // Там же. 1857. Кн. 1. Критика. С. 25-102: Он же. Критические ... // Там же. Кн. 2. Критика. С. 89-166. 西欧派のチエルヌィシェフスキーの共同体論については、大矢温「Н. Г. Чельмушескийの『革命的民主主義』再考」、札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』、2015年、第82号、197-200頁参照。

⁴⁶ Кошелев. Охота пуше неволи // Записки. С. 200-202.

⁴⁷ Он же. По поводу журнальных статей о замене обремененной работы наемною и о поземельной общинной собственности // Там же. 1857. Кн. 4. Критика. С. 109-171.

活発化する中で、コンスタンチン・アクサーコフを中心に論争用の新聞『世評』が発行された。年4回発行の『ロシアの談話』では次の号までの間が空きすぎて機敏に反論できないとの判断だった。創刊号でコンスタンチンは、『ロシアの談話』によって提起された重要問題として、「ロシアの民族的見解」、ロシアの農村共同体、鉄道計画⁴⁸、哲学の新原理の可能性について、およびゼムスキー・ソボールの問題を列挙し、『ロシアの談話』の議論を引き継ぐことを宣言した⁴⁹。ただし、コシェリョーフ、サマーリン、チェルカッスキーは農奴解放問題に関心が集中していたのか、『世評』には寄稿していない。コシェリョーフは1858年3月に『農村の整備』を創刊し、農奴改革についての実務的、実際の議論はこちらに移したのだった。また肝心の『世評』もその論争的な性格が災いしたか、57年いっぱいで廃刊になっている。

58年3月に創刊された『農村の整備』では、コシェリョーフ、サマーリンが中心となって農奴解放に関する問題が議論された。ただしこの『農村の整備』、創刊後1年足らず、58年の末から検閲強化によってその発行が遅れ気味となり、59年2月号を最後に廃刊となっている。その原因としては、59年2月にアレクサンドル二世の命によって法典編纂委員会が設置され、農奴解放の問題が在野のジャーナリズムではなく政府委員会内の議論となったことが挙げられる⁵⁰。この委員会はそれに先立って農奴解放問題を審議していた県レベルの委員会の案を検討して立法化するために召集されたものだった。貴族会を母体とする県レベルの委員会にはサマーリンがサマーラ県、チェルカッスキーがトゥーラ県、そしてコシェリョーフがリャザン県の委員に選出され、それぞれ地方の貴

⁴⁸ 1857年1月に鉄道建設に関する勅令が出されたこともあり、この時期、鉄道建設はアクチュアルなテーマであった。ここでもコシェリョーフは人道的な鉄道網計画に対してモスクワを中心とした「自然な」鉄道網建設を主張している。この点については、大矢「コシェリョーフと近代技術」参照。

⁴⁹ Аксаков. К. С. Обзорение современных журналов // Молва. 1857. № 1. С. 6.

⁵⁰ 農奴制廃止に向けた議論、およびサマーリンの改革案については、竹中浩『近代ロシアへの転換』、東京大学出版会、1999年、61-91頁参照。なおここでコシェリョーフとサマーリンは「リベラル」と分類されているが、本稿で対象としているスラヴ主義とリベラルは矛盾するものではない。「ロシア・リベラリズム」については、大矢「書評：杉浦秀一著『ロシア自由主義の政治思想』、『ロシア史研究』、1999年、第65号、83-94頁参照。

族委員会を基盤に農奴改革の問題を論じていた⁵¹。ただし政府の法典編纂委員会には、サマーリン、チェルカッスキーが「専門家」として招聘されたが、「スラヴ派の頭」コシェリョーフは招かれなかった⁵²。とはいえ、農奴制改革が本格化する中で「スラヴ主義」という思潮の中でも農奴解放に関わる議論が大きな潮流となったことがうかがえる。また、議論の立て方にも抽象的な議論から現実的な議論へと変化が認められる。たとえば農村共同体についても、その道徳的性格やその歴史的起源ではなく、来るべき農奴改革にあたっての有用性、という実務的な政策論の見地から論じられるようになったのだ⁵³。他方、古典派スラヴ派の主要なメンバーの関心が農奴解放に移り、論争の舞台が『農村の整備』に移ったために「お留守」になった形の『ロシアの談話』の編集は1858年第4号（通算12号）からイヴァン・アクサーコフが担当することになった。

『ロシアの談話』58年第4号の巻頭を飾ったのはチェコ人の民族運動家ハンカに捧げられたチュツチェフ詩であった⁵⁴。また、この号にはギルフェルディングによる西スラヴ人についての論文やチェルカッスキーの東方問題の解説など、スラヴ民族および汎スラヴ主義に関する記事がいくつか掲載されている。しかし、このことは、ここでいきなりスラヴ民族・汎スラヴ主義が台頭した、ということの意味しない。むしろ、従来農奴改革議論に押されて目立たなかった問題が、『農村の整備』に農奴改革議論が移ったことによって表面化した、との印象を受ける。むしろ汎スラヴ主義に関しては、巻末に掲載されたイヴァン・アクサーコフによる「1859年の新聞『帆』の出版について」が重要である⁵⁵。

⁵¹ 漸進的な買い上げを主張する政府委員会案に対して、コシェリョーフは59年に他の地方代表とともに自らの農奴案を皇帝に提出しようとする。Кошелев. Записки. С. 111-112. ホミャコフはコシェリョーフ案に賛成し、援護の手紙を書いている。Хомяков. Об отмене крепостного права в России // Т. 3. С. 291-318.

⁵² Кошелев. Записки. С. 108.

⁵³ たとえば1857年の『現代人』4号でチェルヌシシェフスキーは共同体の維持に関してスラヴ派に歩み寄っている。すでに農村共同体の歴史的起源ではなく農奴解放においてそれが必要か否か、に論点が移っている。この点については大矢温「Н. Г. Чернышевский...」、195頁参照。『農村の整備』誌上で展開した議論もロシアをはじめとする外国の経験を参考にしていた。

⁵⁴ チュツチェフの詩「ハンカへ」については大矢他「Ф. И. Чуковский 政治詩試訳(2)」、札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』、2006年、第64号、99-101頁参照。

⁵⁵ Аксаков И. С. Об издании в 1858 году газеты «Парус» // Русская беседа 1858. Кн. 4.

イヴァンによる新しい新聞刊行の宣言である。ここでイヴァンは、新聞『帆』を『ロシアの談話』と同じ方向性に属している」刊行物として位置付け、その新聞の「旗印」として「**ロシアの民族性**（隔字体）」を掲げている。イヴァンは『ロシアの談話』とは別の出版物で自説を宣伝しようとしたのだった。

この新聞では、ロシア以外のスラヴ民族に関する情報を提供する「スラヴ欄」が予定されていた。この「スラヴ欄」の記事を用意したのはモスクワ大学のブルガリア留学生だったといわれる⁵⁶。ブルガリア人とかかわりでは、58年にイヴァンが中心となって「スラヴ慈善協会」が「ブルガリア人支援のために」設立されている。この時期、イヴァンは汎スラヴ主義へと舵を切っているのだ。ただしこの『帆』は、その民族主義的な傾向が危険視されたため、59年第1号（通算2号）をもって発禁処分となってしまった。その1年後、『ロシアの談話』も1860年第2号をもって廃刊になる。これをもって古典的スラヴ派のグループは自分たちの刊行物を失ってしまったことになる。その後イヴァンは『汽船』、『ドゥーマ』などの新たな出版物を計画したが失敗し、1860年の初めからヨーロッパ外遊に出かけてしまった。

この時期、古典派スラヴ派のグループはメンバーの面でも大きな損失を被っている。1859年4月末にセルゲイ・アクサーコフが亡くなると、後を追うようにして60年9月にはホミャコフがコレラで、同じく60年12月にはコンスタンチン・アクサーコフが肺結核で病死したのである。明けて61年2月には農奴解放に関する勅令が公布され、農奴解放に関する議論にも終止符が打たれた。この時点で古典的スラヴ派のグループはキレーエフスキー兄弟、ホミャコフ、コンスタンチン・アクサーコフと多くのメンバーを失い、農奴解放という大きな論点にも終止符を打たれて、ひとつの時代を終えたのであった。

⁵⁶ 「スラヴ欄」の記事を用意したのはモスクワ大学に留学していたブルガリア人 X. カンブロフだったという。Билунов Б. Н. Болгария и Россия. М., 1996. С. 249.

V 農奴解放令以後の「スラヴ派」、「スラヴ主義」

1861年5月にイヴァン・アクサーコフに新聞『日』の発行が許可された。すでに『ロシアの談話』も廃刊になっていたので、この『日』は古典的スラヴ派の編集発行する唯一の刊行物となった。創刊号でイヴァンはスラヴ派の伝統を高く謳う。『日』は「キレーエフスキー、ホミャコフ、およびコンスタンチン・アクサーコフといったロシア思想の苦行者」によって「達成され、確立され、表現された見地」つまり「スラヴ主義学派によって仕上げられた命題」を継承する刊行物なのだ⁵⁷。その上でイヴァンは、『日』の使命をロシア以外のスラヴ系諸民族を含めたスラヴの民族性の意義をロシア世論に宣伝することにあると考えた。なぜなら西欧に対抗して「物質的・精神的抑圧からスラヴ諸民族を解放」することはロシアの「歴史的・道徳的使命」であるからだ⁵⁸。1858年にスラヴ慈善協会設立の中心人物の一人となったイヴァンの説く「スラヴ主義」は汎スラヴ主義の色彩を色濃く帯びていたのである。

とはいえ、すでに農奴解放令が発布された後のスラヴ派は農奴解放という共通のイシューを失っていた。サマーリンとチェルカッスキーは農奴解放の実務のためにそれぞれの領地に戻っていた。最も古株のコシエリョーフもモスクワの「モスクワ農業協会」の議長として主に農奴解放令の実務に従事しながらも、領地に戻ったり外国に出かけたりしてモスクワを留守にしがちだった。結局、モスクワにとどまってジャーナリズム活動をつづけたのはイヴァンだけだった。

イヴァンの下で『日』は早くも創刊第2号において、オーストリア領内のルシン人の民族運動を批判する『現代人』を逆批判し、「西欧派対スラヴ派」という枠組みで古い論争を再開した⁵⁹。この論争の過程で、『現代人』のチェルヌィシェフスキーが「スラヴ人種への愛と呼ばれるものの下に全く別の種類の感情と思想がある」と批判した通り⁶⁰、『日』の論調はポーランド地主を攻撃し、

⁵⁷ Аксаков И. С. Москва 14-го октября // День. 15 октября 1861. С. 1-6.

⁵⁸ Там же. Славянский отдел. С. 15.

⁵⁹ 大矢「ロシア汎スラヴ主義と…」、参照。

⁶⁰ Чернышевский Н. Г. Народная бестолковость // Собрание сочинений. Т. VII. С. 842.

ガリツィア地方のロシア化を進めようとする大ロシア主義的なものだった。

しかしながら農奴解放令直後のロシア社会において、汎スラヴ主義は大きな注目を集めなかった。「スラヴ慈善協会」は慢性的な資金不足に悩んでいたし、スラヴの連帯を謳うべく企画された「キリルとメホディオイ千年祭」も不発に終わった⁶¹。

このような状況を一変させたのが 1863 年のポーランド蜂起、およびそれに続く西欧列強の干渉だった。ロシア世論は民族問題、および西欧対ロシアの問題、といったスラヴ派的論点に、ショービニズム的な立場から目を向けるようになった。他方、領地のあるサマーラ県に帰っていたサマーリンは、県貴族会議においてポーランド問題に関する皇帝への上申書を取りまとめると⁶²、それを『日』に投稿し、それと同時に、ポーランド問題を西欧とロシアとの文明および宗教的対立という見地から分析した論文を寄稿している⁶³。さらにサマーリンは 9 月 7 日号の『日』において、ポーランド問題に関して、哲学の役割、民族原理、東西文明といった従来からの争点を論点に据えて『モスクワ通報』に批判を浴びせ⁶⁴、西欧派との論戦を再開した。名実ともにイヴァンの『日』はスラヴ派の刊行物となったのだ。その後、70 年代の国民的な汎スラヴ主義世論をイヴァンが牽引したことを考慮すれば、以後、「スラヴ主義」は汎スラヴ主義となって展開した、ということができる。

⁶¹ 大矢温「二つの千年祭とイヴァン・アクサーコフ」、ロシア思想史学会『ロシア思想史研究』、2010 年、第 1 号（通巻 5 号）、参照。

⁶² Самарин. Проект адреса Самарского дворянства // Сочинение. М., 1877. Т. 1. С. 299-300.

⁶³ Он же. Как относиться нам Римская Церковь? // Там же. С. 301-308.

⁶⁴ Он же. По поводу мнения Русского Вестника о занятиях философией, о народных началах и об отношении их к цивилизации // Там же. С. 266-292.

むすび

1861 年の農奴解放令に至るまでに、古典的スラヴ派のメンバーは、キレーエフスキー兄弟、ホミャコフ、コンスタンチン・アクサーコフと初期の有力なメンバーを失っている。農奴解放という大きなイシューも消えた。古典的スラヴ主義の時代は終わったのである。となれば、それ以前とそれ以後の「スラヴ主義」の継続性が問題になる。61 年以後も残った古典的スラヴ派はサマーリン、チェルカッスキー、イヴァン・アクサーコフ、そしてコシェリョーフである。となれば問題は、古典的スラヴ主義と 60 年代以降の彼らの思想との関係ということになるだろう。

本論をむすぶにあたって、60 年代以降の彼らの主要な関心事であった、地方分権とゼムスキー・ソボール論、そして言論の自由論について若干検討してみよう。

まず地方分権、地方自治について。サマーリンが 1857 年にトクヴィルの『旧体制と革命』を読んだ後、その読後感として、地方分権を擁護するトクヴィルを「西欧のスラヴ派である」と鉛筆書きメモに記したように⁶⁵、地方自治はスラヴ派の議論の中心的な課題の一つだった。地方行政やゼムストヴォ運動もスラヴ派の伝統的な議論であるゼムリャーの議論から展開したものとみることができよう。コシェリョーフが主張したゼムスキー・ドゥーマ論に至っては⁶⁶、かつてホミャコフが主張した「人民と権力の一体性」のテーゼを制度化したものであった。イヴァンが『日』紙上で展開した自由論も⁶⁷、スラヴ派の伝統的な「国家とゼムリャー」の議論を展開したものとみることができる。

上記のとおり、たしかに理論的一貫性から言えば、汎スラヴ主義以外のスラヴ派の思想もまた、「スラヴ主義」という大きな潮流からその分流が展開した

⁶⁵ Он же. По поводу книги “L’Ancien Régime et la Révolution” // Там же. С. 402.

⁶⁶ Кошелев. Кокой исход для России из нынешнего ее положения? Лейпциг. 1862: Он же. Конституция, самодержавие, и земская дума. Лейпциг. 1862.

⁶⁷ Аксаков Н. С. О Комиссия для пересмотра постановлений по делам книгопечатания // День 12 мая 1862: Он же. По поводу проектируемых законов о печати // Там же. 19 мая 1862: Он же. Ошибочность взгляда, будто свобода слова несовместима с существующею у нас политической формой правления // Там же. 23 января 1863 и т.д.

ものである。しかし、冒頭で述べたように、個別、19世紀ロシアの文脈で「スラヴ派」というのは論争に参加して初めて「スラヴ派」の一員として認められたのであり、こうして特定された「スラヴ派」による議論が「スラヴ主義」と考えられてきたのである。このような事情を考慮すれば、60年代に「スラヴ派」を自称し、新聞『日』を舞台とした論戦の主体となったイヴァン・アクサーコフとその思想を新しい時代の「スラヴ派」、新しい時代の「スラヴ主義」とみなすのも一理ある。その意味で60年代にイヴァン・アクサーコフを中心として、「古典的スラヴ主義から汎スラヴ主義が展開した」、といえるのである。